



今日の紙芝居は「ハトを助けた尸毘王」というお話です。

この尸毘王は、お釈迦さまが仏様になる前の、大昔の話です。

尸毘王は大変に慈悲深く、民衆を愛する心は、まるでお母さんが我が子を愛するようでありました。

その姿をありのままに見ていた、毘首羯磨天という帝釈天に使えていた神様が、「この王こそ仏様になられる方です」と報告いたしました。

そこで、帝釈天は「この尸毘王の慈悲の心が形だけのものか、本物なのかテストしよう」と言い出しました。

そして、毘首羯磨天はハトに身を変え、帝釈天はタカになってハトを追いかけ……。

はてさて、この後はいったいどうなるのでしょうか？尸毘王はどうやってハトを助けるのでしょうか。その答えはこの後のお話で解りますよ。ではしっかりと聞いて下さいね。



むかし、むかし、世の中に、仏様がいらつしやらない時のことです。

「ふう〜。仏様を求めているのに、この世に仏様がいないとは、なんということだ」と帝釈天たいしやくてんが大変憂うれえていました。

そこに帝釈天に使つかっていた、毘首羯磨天びしゆかつまてんが現あらわれて、

「帝釈天様、あれを御覧ごらん下さい。あのお方かたは、たいへん慈悲じひぶかい、広こう大な智ち慧えを備そなえ、全すべてにおいて勝すぐれた大菩薩だいぼさつです。あのお方こそ、間もなく仏様になるお方です」

と言いいました。

そのお方は、尸毘王しびおうという王様おうさまでした。



二人は、尸毘王しびおうが本物の菩薩ぼさつであるか試ためしてみることになりました。

帝釈天たいしゃくてんは毘首羯磨天びしゅかつまてんに、

「おまえはハトになりなさい。私はタカとなります。わたしはおまえを追おいかけます。おまえは怖おそれて、王様のふところに逃げなさい」と言いました。

毘首羯磨天びしゅかつまてんは自ら変へんじてハトとなり、帝釈天もまた自ら変じてタカとなり、ハトがタカに追いかけられ、

「慈悲こゝろぶかい王様。恐こわいタカに追われています。どうか助けてください」

と王様のふところに飛び込んでいきました。



ハトは王様のふところの中で、恐怖のあまり声も出ません。ブルブルふるえていました。タカは追いかけてきて

「私のハトを返しなさい。それは私のものだ」と言いました。

王様は

「おまえよりも先にこのハトを得たので、おまえに渡すことはできない」と、断りました。

するとタカは

「王様は全ての者に慈悲深いお方と聞いた。なのに、私の今日の食べ物を奪ってしまったのか？」

と王様に詰め寄りました。

王様は、

「それでは代わりの食べ物を与えよう。おまえは何を食べるのか？」

とタカに尋ねると、タカは、

「殺したての血のしたたる肉が欲しい」と言いました。



王様は

「それは難^{むずか}しいことだ。殺したての肉を与え
るためには、他の命を殺さねばならない」
と、困^{こま}ってしまいました。

そこで、王様は

「他の者の命を奪^{うば}うことはできない。そうだ
自分のこの身をおまえに与えよう」
と、自分の肉をタカに与えるために、人を呼
んで、刀^{かたな}を持たせ、自分の太ももの肉をさき
ました。

タカは、

「肉の重さがハトと同じでなければならぬ。
まだハトの方が重いではないか。私をだます
つもりか？」
と、ハトと王様の太ももの肉を秤^{はかり}にかけて比^{くら}
べました。

王様は、もう片方^{かたほう}の足の肉を切って、秤^{はかり}に
のせましたが、まだまだハトの方が重いので
す。



王様は、その他、^{ほか}からだのいたるところの肉を秤^{はかり}にのせましたが、それでもハトの方が重いのです。

その時、王様のそばにいる者たちが、幕^{まく}を張^はつて、王様の姿を人々に見せないようにしました。王様は、

「かまわぬ、ありのままを見せなさい」と言い、自分のからだを秤にのせようとした。タカは

「この事実はどうしようもない。ハトを私によこしなさい」

と、言いましたが、王様は、

「ハトは私のところに助けを求めてきたのだ。けっしておまえには渡さない」

と、ありつたけの力を持って、秤にのろうとしましたが、体中の肉がなくなっているため、なかなかのれません。

はうように、やつとのことと、秤にのり、「これでどうだ」と全てを捧^{ささ}げました。



これを見ていたたくさんの人々が、

「二匹の小鳥のために自分の身体を投げ出す
王様は、慈悲の王様、命を惜しまず教えをま
もる王様、やはり素晴らしい」

と口々に絶賛しました。

と、同時に、大地が振動し、枯れ木に花が咲
き、空から香りの雨が降り、きれいな花がひ
らひらとおちてきました。

そして天女たちが歌いながら、

「必ずこのお方は仏になる」

と誉め称え、たくさんのお神様たちも、

「これ真の菩薩、きつと成仏して仏になるで
あろう」

と最大にお誉めになりました。

そして夕方はハトに向かって

「おまえの言っていたことは本当であつた。

この方こそ真の大菩薩である」

と王様が、大菩薩であることを認めました。



ハトがタカに

「大菩薩であることが証明しょうめいされたのだから、早くもとの王様のからだにもと戻してください」と、言いましたが、タカは帝釈天の姿に戻り、

「その必要はない。王様は自らの悟さとりによつてもとの姿に戻るであろう」

と告つげました。そして王様に向かつて、

「あなたは、自らの肉を切つて、その苦しみで心が悩なやむことはなかつたか？」

と聞きました。すると王様は、

「私は心が歡喜かんきし、少しも悩むことはありませんでした」

と即座そくざに答えました。すると、たちどころに王様のからだかもとの姿に戻ったのです。

このお話は、わが身を惜おしまわずに教えを求めらる姿。逆境ぎぎゃくきやう・苦悩くのう・迫害はくがいにも屈くつしないで、正しい教えを貫つらぬき通していくことの大事さを教えたものであります。みんなもいつも真剣しんけんにお題目を唱えて、困難こんなんを乗り越えていける信心をしていきましょう。以上で終わります。